

バードリサーチ ニュース

2005年9月号 Vol.2 No.9

2005.9.14

Photo by Uchida Hiroshi



活動報告

関東カワウモニタリング2005年7月 調査結果報告

加藤ななえ

バードリサーチでは年3回(7月・12月・3月)、関東で確認されているねぐら(繁殖地を含む)のほぼ全てでカワウの個体数と営巣数を調査しています。今回はのべ106人の方にボランティアで参加していただき、72ヶ所のねぐらでカワウの個体数と営巣数を調べ、また脚環の発見に努めていただきました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございます。



図1. 谷津干潟で8月に観察された2005年春生れの幼鳥
[photo by 田島基之]

利用されていた場所は72ヶ所中54ヶ所で、2ヶ所のねぐらが新しく追加され、5ヶ所のねぐらが利用されていなかったの、全体としては3月の調査時よりも3ヶ所減少しました。新しく追加されたねぐらの一つは、神奈川県の大野貯水池ですが、このねぐらは2004年12月から使われていたそうです。以前から「怪しい」という話が出てはいたのですが、人があまり立ち入らない場所であることから確認が遅れました。また、千葉県の手賀沼も今回新しく追加されましたが、実際には2004年10月にはねぐらとして利用していたことを、地元で野鳥を調査・観察されている方から教えていただきました。

カワウの個体数の総数は17,589羽で、前回の3月の調査時よりも3,234羽増加しました。この増加は、今年の繁殖期に巣立った幼鳥の加入によるものと考えられます(図1)。

都県ごとのねぐら箇所数と個体数を見ると、千葉県と東京都にカワウが多くいることが分かります(図2)。これは、沿岸部のねぐらに、内陸部から移動してきたカワウが集中しているためと考えられます。海岸線から10km以内を沿岸部、それ以上を内陸部のねぐらとして集計すると、2005年7月の調査では、関東全体のカワウの約7割が、沿岸部のねぐらを利用していただけました(図3)。表1は、今

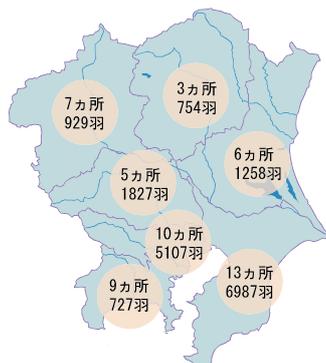


図2. 2005年7月の都県別のカワウのねぐら箇所数と個体数

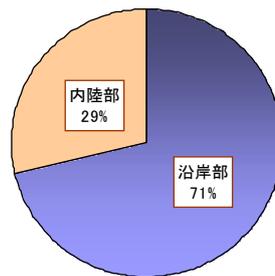


図3. 沿岸部と内陸部のねぐら個体数の割合(2005年7月)

表1. 2005年7月の調査で個体数の多かったねぐら ベスト5

順位	名前	個体数
1位	行徳鳥獣保護区*	4,267
2位	新砂貯木場*	2,439
3位	第六台場*	1,686
4位	武蔵丘陵森林公園	1,440
5位	小櫃川河口*	1,056

回の調査で個体数が多かった上位5ヶ所を示しています。名前に*が付いている4ヶ所のねぐらはいずれも東京湾の沿岸部に位置しており、この4ヶ所だけでも、関東の全個体数の53.7%を占めています。夏には東京湾の三番瀬や葛西沖、盤洲干潟などで大きな群れになって採食している様子が見られ、この時期沿岸部は食物が豊富なようです。

昨年の7月からの各都県別の個体数変化は、図4のようになります。グラフの折れ線が見やすいように、北関東(茨城・栃木・群馬・埼玉)と南関東(千葉・東京・神奈川)に分けて表しています。茨城、栃木、埼玉、神奈川の個体数変化が似た傾向にあるのがわかります。過去10年間の調査記録からも、内陸部のねぐらで冬に個体数が増える傾向があることが分かっています。ただ、群馬県は、あまり季節による個体数変化がないようです。なぜまわりの県と異なった傾向になるのかは不明です。食物資源としての採食可能な魚の量の変化がどのようになっているのか、河川湖沼の魚類資源量のデータと合わせて考える必要があると思われます。

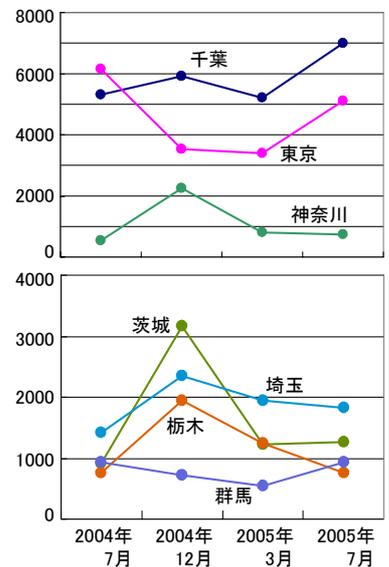


図4. 都県別のカワウの個体数の変化(2004年7月~2005年7月)

今回の関東の一斉調査は12月です。カワウのねぐらの情報をお持ちの方、またねぐら調査に参加してみたい方は、加藤(kato@bird-research.jp)までご連絡ください。関東以外の地域からのカワウ情報もお待ちしています。

活動報告

飛翔性昆虫ウォッチ 試験調査報告 — 東京都中西部での試行 —

植田 睦之

5月号のニュースレターでも少しご報告しましたが、東京都中西部のぼくの通勤経路で、この夏、2つの方法で飛翔性昆虫のモニタリング調査の試行を開始しました。

夏鳥をはじめとした鳥たちが減少していますが、その原因として、今まで言われてきた越冬地の環境破壊のほかに、食物である飛翔性昆虫の減少も影響しているのではないかと思います。遅ればせながら、そのモニタリング体制をつくろうと思ひ、この調査をはじめたのです。

試した方法は2つ。1つは原付(50ccのバイク)に捕虫網を装着し、走りながら虫をサンプリングする「原付トラップ」。もう1つは自動販売機の光に夜に集まってくる虫をかぞえる「自動販売機トラップ」です。

原付トラップの方は、5月のアブラムシがたくさん飛んでいる時期は、アブラムシがたくさん網に入り、「これは使えるな」と思ったのですが、その時期を過ぎるとめっきり虫が入らなくなりました。原付トラップよりも大規模な方法ですが、昆虫の研究者は自動車の屋根に網を設置する「トラックトラップ」という方法でサンプリングをしているそうです。本によると、このトラップでは処理に困るほどたくさんの虫を捕獲できるそうなので、原付トラップに虫が入らなかったのは、方法が悪いのではなく、単に調査地に虫が少なかったためにうまくいかなかったのかもしれない。来年は虫が多いと考えられる山の方や川の近くで調査するなど、再試行してみようと思っています。

自動販売機トラップの方はなかなか興味深い結果が得られました。毎月1回、3~4日かけて自動販売機に集まってくる虫を小さい虫、中くらいの虫(1cm前後)、大きい虫(2cm以上)に分けて数えてみたのですが、春先の4、5月は、



写真. 自動販売機トラップにかかった虫。

川の周囲に虫が多く、季節の進行に伴って、内陸部との差があまりなくなっていくのわかりました(図1)。また、便宜的に、中くらいの虫を小さい虫5匹分、大きい虫を10匹分として、昆虫量の季節変化をみると、5、6月に虫が増加し、7、8月は再び減少しているのわかりました(図2)。

自動販売機に集まってくる虫はユスリカやカゲロウの仲間や小型のハエやガの仲間が多く、必ずしもツバメが食べている虫ではありませんが、調査地で繁殖しているツバメの繁殖成績の季節的な変化を見てみると、5、6月に繁殖しているツバメの巣からは4羽とか5羽のヒナが巣立っていたのに対し、7月とか8月に繁殖しているツバメの巣からは3羽くらいしかヒナが巣立っていませんでした。ツバメの繁殖成績と飛翔性昆虫量がちょうど一致していたので、このような虫の量の季節変化がツバメの繁殖成績にも影響しているのかもしれない、と思いました。

今回の予備調査から、原付トラップの方は、まだわかりませんが、自動販売機トラップの方は、地域的な違いや、時期的な違いが見えてきたところをみると、モニタリング手法として使えそうな感触が得られました。来年はみなさんにご協力をいただいて、いろいろなどころで調査をやってみて、その他の地域でも使えそうかを確かめるとともに、調査手法の問題点を抽出したいと思ひます。そして、再来年くらいから本格的に「飛翔性昆虫ウォッチ」をはじめられたら、と思ひています。

ちなみに今回の調査からも、南風の日には川の北側に虫が多く、北風の日には南側に多いなど、虫が風に流されて簡単に分布が変わってしまうので、風の影響に注意しなくてはならないこと、場所による個体数のばらつきがけっこうあり、その地域の状況を把握するためには複数の地点で調査をする必要があることなど、いくつかの問題点が見えてきています。

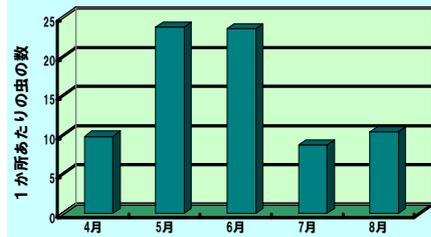


図2. 飛翔性昆虫の量(大きさに応じて重み付けしている)の季節変化。5月、6月に昆虫量が増加し、7月、8月には減少しているのがわかる。

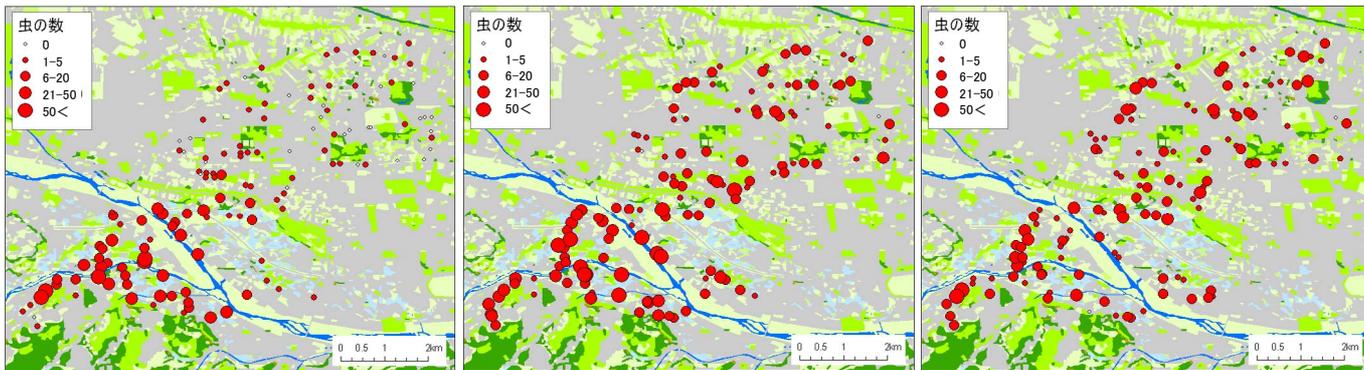


図1. 4月(左)、6月(中央)、8月(右)の自動販売機トラップによる調査の結果。春から夏にかけて川沿いから全域へと昆虫の分布が変化していくことがわかる。

調査参加者募集

季節前線ウォッチ 秋の調査にご協力ください！

植田睦之

春の季節前線ウォッチにご協力いただき、ありがとうございました。おかげさまで、ツバメやカッコウなど、種によって季節前線の進行が違っていることがわかってきました。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kisetsu/kisetsu2005.html

さて、早いもので、もう秋の季節前線ウォッチの調査が始まります。秋の調査ではモズの初鳴き(高鳴き)とジョウビタキやツグミの飛来を調べます。

モズの高鳴きについては早くも9月9日に長野県の植松さんと石川県の今森さんから最初の情報をいただきました。そろそろ各地でも高鳴きが聞かれるころと思いますので、初鳴きを聞かれた方はぜひ、ホームページからお知らせください。



夕日の中のモズ。[photo by 内田博]

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_kisetsu_chosakekka.html

モズの高鳴きがどんな声か聞きたい方は、松田道生さんに音源を提供いただいて、ホームページ上から聞けるようになっていますので、お聞きください。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_kisetsu_taisho.html

モズは繁殖分布が縮小してきていることが環境省の繁殖分布調査からわかってきました(今月中旬発売のBIRDERに記事を書いているのでお読みください)。しかし越冬状況がどう変化しているかについては、わかっていません。高鳴きの情報を集めていく過程で、越冬状況についても見えてくるかもしれません。ぜひご協力をお願いいたします。

ミヤマガラスの初認調査に ご協力ください！

高木憲太郎

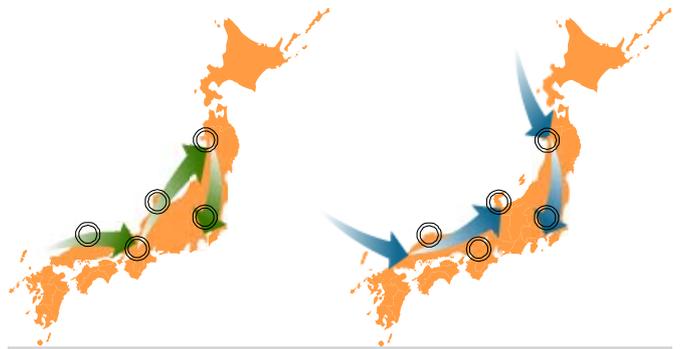
昨年の調査によって、ミヤマガラスの分布の拡大の経緯が見えてきました。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_miyamagarasu_chosakekka.html

ところで、実際に毎年やってくるミヤマガラスは、どんなルートをたどって渡って来るのでしょうか？今年からは、この疑問にトライしてみようと思います。しかし、渡りのルートを直接調査することは、簡単にはできません。そこで、各地の初認日を比較することで、なにか見えてこないだろうか？と考えました。

水田や畑などの多い場所をフィールドにしている皆さま、今年、ミヤマガラスを観察されましたら、ぜひ、下記ホームページのフォーマットからお知らせください。また、文献の情報も募集しています。ご協力をお願いいたします。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_miyamagarasu_shonin.html



ミヤマガラス初認調査のイメージ図。仮に、5ヶ所(◎)の地点から情報が届いた時、初認日の早い順番につなぎ合わせる。それによって、分布拡大の経緯と同じように西から日本海側に沿って北上し、最後に関東へ南下してくるような一繋がり(左図)になるのか、西日本と東日本で並行して、複数のルートが想定(右図)されるのかを調べる。

参加型調査紹介

ヒヨドリ渡り調査 2005 への参加のお願い

秋になると、ヒヨドリが西や南に向かって群れで飛んでいく姿を見るようになります。このような姿は関東でも関西でも見られますし、北海道の白神岬、愛知県の伊良湖岬などでも数十から数百羽もの群れになって



渡りをするヒヨドリの群れ。

次々と海を渡っていくところを見ることが出来ます。ツルやサシバなど大型の鳥では衛星用の送信機を使って、渡りのルートが直接調べられています。しかし、ヒヨドリに装着するには衛星追跡用の送信機は重すぎます。そのため、この鳥の渡りについては、わからないことばかりなのです。

では、全国からヒヨドリの渡りの観察情報を集めたらどうなるだろうと考え、2004年の秋からヒヨドリの渡りの調査を始めました。(2004年の結果はこちら。 <http://narc.naro.affrc.go.jp/kouchi/chougai/wildlife/bulbul/bulbul-migration2004.html>)

今年も昨年同様、ヒヨドリの渡り情報を集めます。ご参加いただける方は、下記までメール、電話等でご連絡ください。皆様のご参加をお待ちしております。

【山口恭弘 中央農業総合研究センター鳥獣害研究室】

参加申し込み先:

〒305-8666 茨城県つくば市観音台3-1-1

中央農業総合研究センター鳥獣害研究室

山口恭弘 e-mail: yamay@affrc.go.jp

tel: 029-838-8925, fax: 029-838-8837

<http://narc.naro.affrc.go.jp/kouchi/chougai/wildlife/bulbul/bulbul-migration-investigation.html>

オオセグロカモメ 英:Slaty-backed Gull 学:Larus schistisagus

1. 分類と形態

分類: チドリ目 カモメ科
 全長: 55-67cm 尾長: 190mm (178-196)
 翼長: ♂44.7±SD1.4cm (n=9) ♀42.2±SD0.9 cm (n=12)
 嘴峰長: 62mm (56-66) ふ蹠長: 67mm (57-71)
 体重: ♂1.35±SD0.11kg (n=9) ♀1.11±SD0.11kg (n=12)
 ※全長は del Hoyo et al. (1996), 翼長と体重は Watanuki (1989), 他は榎本(1941)による。

羽色: 雌雄同色。成鳥は、背と翼の上面が石板のような濃い灰褐色。下面は全体に白いが、翼の先端は黒くて白い斑がある。尾は白い。くちばしは黄色く、下くちばしの先端近くに赤斑がある。脚はピンク色で、個体によって濃淡に差が見られる。若鳥は、背と翼の上面は淡い茶褐色で、くちばしは成長するにつれて黒から褐色へと変わる。脚はややピンク色がかった薄い褐色。尾の先端は黒い。



写真1. オオセグロカモメの成鳥。

2. 分布と生息環境

分布: ユーラシア大陸の東側にのみ分布する。繁殖地は、カムチャツカ半島、サハリン、ウラジオストック周辺のロシア沿岸、千島列島、北海道、東北地方。国内では繁殖地が徐々に南下している。越冬地は、日本各地から朝鮮半島南部、中国沿岸、台湾周辺。

生息環境:

沖合、沿岸、内湾、港、河口などに生息する。海岸の切り立った崖の上や、草の生えた土手などの他、堤防やテトラポットなどコンクリート上にも営巣する。



写真2. オオセグロカモメの親子。天売島撮影。 [photo by 富田直樹]

3. 生活史



繁殖システム:

基本的に一夫一妻。海岸の岩礁などで、数百～千数百巣に及ぶ大きな集団繁殖コロニーを形成するが、単独営巣も見られる。一方、日本で繁殖するもう一種のカモメ類であるウミネコの単独営巣はほとんど見られない。オオセグロカモメはウミネコよりも臨機応変に営巣形態を選んでいるようだ。

巣: 地面に浅い窪みを作るか、裸岩上の自然のくぼみを利用してそこに枯草などの巣材を集めて、直径30cm程度の皿型の巣を作る。

卵、一腹卵数、育雛期間:

卵はニワトリよりも少し大きく、緑がかかった薄い褐色地に濃い茶色の斑紋がある。産卵数は1～3卵で、1～2日おきに1卵ずつ産み、3卵巣の比率が最

も高い。時折4卵巣も見られるが、カモメ類ではまれに雌同士がペアになり2羽とも産卵することが知られている。オオセグロカモメの4卵巣も雌同士のペアによるのかもしれない。

通常3卵までしか産まないのは何故か? その疑問を解明するため、人為的に卵やヒナの数を4つに増やす実験が行われた。その結果、抱卵日数が長くなった(高橋ら1999)が、それは4卵のときに3卵のときよりも卵の平均温度が低くなるため(綿貫ら 未発表)だと考えられる。オオセグロカモメの抱卵斑は3つであるため、4卵を効果的に温めることができないらしい。また、4羽のヒナを育てさせると3羽のときよりもヒナの成長速度が低下した(綿貫ら 未発表)。カモメ類では成長速度が高いヒナほど巣立ち後の生存率が高いことが知られているので、4羽にすると不利なのかもしれない。

ヒナは40日前後で巣立つ。巣だった後も時折巣に戻って、しばらくの間親から給餌などの保護を受ける。



写真3. オオセグロカモメのヒナ。 [photo by 富田直樹]

4. 食性

浮魚、底魚(投棄された魚)、海産無脊椎動物、海鳥のヒナなどを食べる他、農業廃棄物も食べる。

北海道羽幌町天売島での行動観察から、雌雄間および雄の個体間に大きな食性の変異があることが明らかになっている(Watanuki 1989)。ヒナに与えた餌を調べたところ、雄は頻りに底魚と海鳥のヒナを給餌し、雌は浮魚と海産無脊椎動物を給餌した。雄の中には海鳥のヒナを専門的に捕食する個体があり、そのような個体は通常はカモメ類(オオセグロカモメとウミネコ)のヒナを捕食する(表)。海鳥のヒナを専門とはしない個体は、多くがウトウのヒナを捕食する。開けたスペースで繁殖するカモメ類のヒナを捕獲する場合と、草むらの土中に穴を掘って繁殖するウトウのヒナを捕獲する場合とは、異なる捕獲方法をとる必要がある。こうした捕獲技術の個体差が餌の選好性と関係しているようだ。

ヒナに与えた餌の種類	主に海鳥のヒナを捕食している雄	雌、および主に魚を捕食している雄
オオセグロカモメのヒナ	40 (19.4%)	1 (3.1%)
ウミネコのヒナ	5 (2.4%)	0 (0.0%)
ウトウのヒナ	34 (16.5%)	20 (62.5%)
海鳥の肉片(臓器)	76 (36.9%)	2 (6.3%)
判別不能なヒナ	51 (24.8%)	9 (28.1%)
合計	206	32

表. オオセグロカモメが、ヒナに給餌した餌の種類。Watanuki (1989) を変更。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

●都市で暮らすカモメ

最近、札幌市の中央に位置する北海道大学の上空を夏でもオオセグロカモメが飛び交い、ススキノ歓楽街でも姿を見かけるようになった。3～4年ほど前から札幌中心部にある立体駐車場の屋上で営巣しているからだ(足立 2003)。オオセグロカモメが人工建築物に営巣することは以前から知られていたが、それは釧路などの港町でのことだった。人口170万人を超える都市の中心で繁殖しているのは驚きだ。

札幌は内陸にあるとはいえ、石狩湾まで15kmほどである。カモメにとってはひとつとびの距離かもしれない。しかし、わ

生態図鑑

ざわざそれだけの距離を飛んでいくには時間がかかり、エネルギーも消耗するだろう。彼らは札幌市街と日本海とを行き来しながら生活しているのだろうか、それとも都会の中だけで生活しているのだろうか？

港町で営巣する場合は漁港や市場などで魚くずを拾っているようだが、札幌ではそれほど人間の出すゴミに依存しているわけではなさそうだ。騒音(鳴き声)に対する苦情はあるものの、ゴミあさりに対する苦情はあまり無いらしい(北海道庁 武田忠義氏, 私信)。一方で、都市公園での人による餌付け行為がオオセグロカモメを都市に惹きつけている可能性は高い(北海道東海大学 竹中万紀子氏, 私信)。

今後はヒナに与えている餌内容を分析したり、発信機をつけて行動範囲を調査することで、都市に住むカモメの生態を明かにしたい。オオセグロカモメの適応力を知る手がかりになるだろう。また、こうした都市への適応を明かにすることは海鳥全般の保護管理を考える上でも重要だ。他の海鳥のヒナをも餌とするオオセグロカモメが急激に増加すると、ウミガラスなどの希少種にとって脅威となる。オオセグロカモメは各地で個体数を増やしているが、その主要因として人間の出す廃棄物や安易な餌付けなどが考えられる。人間活動がどのようにオオセグロカモメの増加に影響しているのかを明かにすることは今後の重要課題である。

●オオセグロカモメとその仲間の系統関係

オオセグロカモメは、セグロカモメやワシカモメといった他の大型カモメと形態が似ている。遺伝的にも非常に近いことが最近のDNA分析から明らかになった(Crochet et al. 2000)。筆者らが行ったミトコンドリアDNA領域を対象とした分析では、これらの仲間は多くの遺伝子型を共有し、遺伝的な差異はほとんど見られなかった(図)。例えば、モンゴル周辺にはキアシセグロカモメ(*L. cachinnance*)の亜種とされているグループ(*L. c. mongolicus*)が生息する。筆者らのDNA解析では、このグループの遺伝子型は全てオオセグロカモメのものと一致した。つまり、このグループは極東に生息するオオセグロカモメからごく最近、分岐した可能性が高い(逆にこのグループからオオセグロカモメが分岐したとも考えられる。Olsen & Larsson 2003)。

日本では冬期に多くの大型カモメが飛来し、その識別はバードウォッチングの一つの楽しみにもなっている。しかし、非常に変異が多いはずのミトコンドリアDNA領域でさえ遺伝子型を共有している状況を考えると、形態の差(羽色の濃淡など)も種間でオーバーラップしているのではないか。色の濃いセグロカモメだと思っていた個体(シベリアから来たと思われる個体)が、実は色の薄いオオセグロカモメ(カムチャツカや北海道から来た個体)だということもありえる。

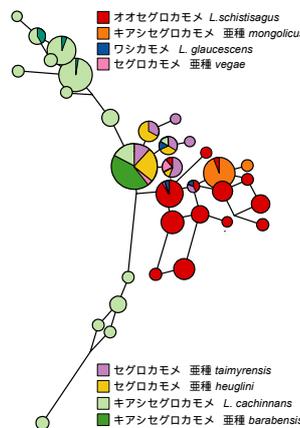


図. 大型カモメ類の遺伝子型の系統関係(Median-Joining network)。各円は遺伝子型を示し、円の大きさはサンプルサイズを表す。最も短い距離で結ばれているものは約800塩基中に1塩基しか違いがない。

日本だけでなく、シベリア、カムチャツカ、モンゴルなどの繁殖地において、一つの繁殖コロニー内にどの程度の形態差が存在するのか、詳細な調査が必要ではないだろうか。

ちなみに、大型カモメの仲間は「環状種」として知られる。環状種とはある種(または複数の種や亜種)の分布域が連続しており、隣接した地域間の変異は小さいが、環状に一周して交わった地点では地域変異の積み重ねによって変異が大きくなる(生殖隔離などが生じる)種またはグループのことである(Mayr 1963)。大型カモメの場合、セグロカモメやニシセグロカモメ(どちらも複数の亜種に分類されている)が北極海を中心に分布し、ヨーロッパでその環が閉じていると考えられてきた。ところが最近の研究から、遺伝子型の分布は完全には連続していない、つまりこれらは厳密には環状種ではないことが分かってきた(Liebers et al. 2004)。今後さらに地域種(亜種)の遺伝的な連続・非連続性や地域間の遺伝関係を明かにすることで、オオセグロカモメを含めた大型カモメ類の種分化の歴史が解明されるであろう。

6. 引用・参考文献

足立英治. 2003. 札幌市街地で繁殖するカモメ. モーリー9号. 北海道新聞社. 21-22.
 Crochet, P.A. et al. 2000. Molecular phylogeny and plumage evolution in gulls (Larini). Journal of Evolutionary Biology 13: 47-57.
 del Hoyo, J. et al. 1996. Family LARIDAE (GULLS). Handbook of the Birds of the World. Vol.3 Hoatzin to Auks. Lynx Edicions. Barcelona, Spain. 572-623.
 榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧(下). 日本野鳥の会大阪支部.
 Liebers, D. et al. 2004. The herring gull complex is not a ring species. Proc. R. Soc. Lond. B. 271: 893-901.
 Mayr, E. 1963. Animal species and evolution. Belknap Press of Harvard University Press. Cambridge.
 Olsen, K. & Larsson, H. 2003. Gulls of North America, Europe, and Asia, Princeton University Press. Princeton and Oxford.
 高橋康朗ほか. 1999. 抱卵コストはオオセグロカモメのクラッチサイズを制約するか?. 日本鳥学会誌 48: 127-133.
 Watanuki, Y. 1989. Sex and individual variations in the diet of Slaty-backed gulls breeding on Teuri Island, Hokkaido, Jap. J. Ornithol. 38: 1-13.

執筆者

長谷川 理 北海道大学 大学院地球環境科学研究所
オゾン層破壊評価分野

カモメなど集団繁殖する鳥の行動に興味がある。最近あまり長期のフィールド調査に出られずDNA分析をしているが、できることなら行動観察ばかりしていきたい。以前はオオセグロカモメのことを目付きが悪くて可愛げの無い奴だと思っていたが、観察を続けるうちに非常にきれいな鳥だと思ふようになった。海から吹き上げる風の中を巧みに飛び交いヒナ達に餌を運ぶ姿は美しい。彼らを見習って日々給餌に励むのだ。



研究誌掲載論文

チュウヒの採食環境としての人工浮島の効果

3本の論文が新しく掲載されました。

1つは平野敏明さんによる「チュウヒの採食環境としての人工浮島の効果」という論文です。チュウヒ類の渡来地として有名な渡良瀬遊水地の湖に設置された人工浮島のチュウヒの利用状況を示した論文ですが、チュウヒは浮島を本来の生息地であるヨシ原と同じくらい採食地として利用するという事です。ねぐらなどほかの要因があるので、ダムなどに浮島を浮かべたからといってチュウヒが飛来するという事にはならないでしょうが、チュウヒが飛来しているところで、チュウヒの生息環境を良くしようといった時には人工浮島を設置するのは良い方法かもしれません。そんなことをする時のためにも、チュウヒ以外の鳥あるいは他の生物に浮島がどのような良い影響、あるいは悪い影響を与えるのかも知りたいところですね。



渡良瀬遊水地の人工浮島。

黒沢令子・隆さんから、研究誌のために40万円のご寄付をいただきました。研究誌の印刷配布等の経費として有効に使わせていただきます。ありがとうございました。

シジウカラ類とスズメの巣の構造の経年変化 カラス類による巣箱破壊の経年変化

あと2つは、峯岸典雄さんによる「シジウカラ類とスズメの巣の構造の経年変化」と「カラス類による巣箱破壊の経年変化」です。峯岸さんは、毎年、全国のゴルフ場にかけて3,000個もの巣箱の繁殖状況を調査してきたのですが、その際に見られたシジウカラ類とスズメの巣の巣材の量が減っていることとスズメの巣がオープンネスト化していること、そして、カラス類による巣箱の破壊が1995年から1999年までの5年間急増し、その後ほとんどなくなったことについてまとめたものです。巣材が少なくなったのは、カラス類による巣箱の破壊が増えた時期と时期的に一致しているのではと考えていますが、カラス類の巣箱破壊がなぜこの期間のみにたくさん起きたのかはわからないということです。

現時点では理由のわからない現象も記録として残しておくか、そのまま埋もれていってしまいます。記録として残しておくことで、将来その原因がわかるかもしれません。何か面白い現象を観察された方は、ぜひ論文としてまとめて、Bird Researchへご投稿ください。

【植田睦之】

活動報告

研究誌 Bird Research が J-STAGE に登録されました！

植田睦之

J-STAGEは国内の多くの学会が登録している電子ジャーナル等の配信サービスです。Bird ResearchがそのJ-STAGEから閲覧できるようになりました。Bird Researchの論文を多くの研究者に利用してもらう上で、大きなきっかけになると思います。

J-STAGEでは、掲載論文のリアルタイム情報の提供をしています。Bird Researchの最新目次の提供は、Bird Researchのホームページのほか、今後はJ-STAGEを通して行ないたいと思います。メールアドレスをJ-STAGEに登録していただき、Bird Researchを目次配信に登録すると、新しい論文が掲載されるたびに、その情報が登録のメールアドレス

に配信されるようになります。目次配信を受けるための手引きをhttp://www.bird-research.jp/1_kenkyu/j-stage/ に用意しましたので、こちらをご覧ください。ぜひ、ご活用ください。また、これに登録いただかなくても、少し遅くはなりますが、ニュースレターで新掲載論文の情報はみなさまにお送りいたしますので、その点をご心配なく。

J-STAGEでは、日本鳥学会の英文誌、日本生態学会の講演要旨集などの関連する学会誌の目次も見ることができます。ぜひご活用ください。

J-STAGE: <http://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>

Bird Researchのページのバナー。何度もやり取りしただけに、なかなかの出来栄です。

バードリサーチニュース 2005年9月号 Vol.2 No.9

2005年 9月 14日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 I-102

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: info@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎